

## 研究課題名： 脱工業化時代の都市計画におけるローカルな民主主義の可能性

### 1. 研究計画・目的

報告にあたって、まず、研究が進むにつれ、研究課題の設定自体の限界が見えてきたことを記しておきたい。当初は、2016年度から取り組んでいたオリンピック都市計画において、脱工業化、すなわち鉱工業の国外移転とその跡地の利用について、以前の産業に関する労働者層などをはじめとする住民の意思などが顧みられない問題があり、フランスやイギリスでそれをどのように民主化しているのかを調査するというのが研究の趣旨であった。しかし、世界情勢の変化によって、再工業化と言える情勢も現れ、またある意味では当然ながら、扱う地域によっては鉱工業の役割を過小評価できないところがあり、脱工業化という局面に絞ることが現代のローカルな民主主義を問うための切り口にはなりえないことが見えてきた。その意味で、「現代ヨーロッパの都市計画におけるローカルな民主主義の可能性」というのが、本研究の再設定された課題となっている。

計画としては、まず以前から研究・教育上の交流があったフランス南西部のポー・アジュール地方大学 (UPPA) の地理学教室に4月から1月初めまで滞在し、二つの学期を通じて地域の実態をより具体的に知るとともに、民主主義的な実践の在り方を探ることとした。1月から3月までは、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス (LSE) の地理環境学教室に滞在し、最先端の理論に触れるとともに、いくつかの具体例についての調査を進めることとした。また1年のうち3回、パリでの資料収集・現地調査を行い、オリンピックに関連する都市計画のその後の表れについて検討することにした。

### 2. 研究活動

UPPAには、国際地理学会議の地理思想(地理学史)部会の世話役であったヴァンサン・ベルドゥレイ教授およびジャン＝イヴ・ピュヨ教授がいることから、すでに研究上の交流があり、何度か訪れた経験があった。穏やかな周辺環境に惹かれ、明治大学文学部と協定も結び、その際にはイザベル・ドゥグレモン准教授とも密なやり取りがあった。そのため、報告者は周辺地域については一定の知識もあり、学会にも請われて、今回の滞在前に一般向けに小さなエッセイを書いたこともあった(荒又美陽 2017「フランス南西部・ベアルン地方—ローカルな文化と観光、グローバル化」『E-Journal GEO』12(1)、118-123)。

今回の受け入れに際しては、立ち上がったばかりのフランス語圏地理学会において一緒に歴史遺産部会のメンバーとなっていることから、ドゥグレモン准教授に引き受け責任者になってもらった。連絡が密であっただけでなく、彼女の専門はフランスの地方における文化財の政策的位置づけと保存実態の分析であり、今回の研究テーマに適合した研究者でもあった。

滞在の前半においては、周辺の地勢を頭に入れることに注力した。主要都市や歴史的な中心部、また行政界の在り方などについて確認し、また現地調査を行った。ポーの中心部にかかる建築制限を伴う文化財保護規定とその思想を調べるとともに、ローカルな街並みを作り出した建築家たち(Jacques Ruillier, Joseph Larregainら)の作品とその位置についても整理した。

6月中旬には、フランス語圏地理学会の地理思想部会と文化地理学部会によるジョイン

トセミナーがミラノで開催され、報告者も口頭発表を行った。テーマは北海道の彫刻設置事業とセトラ・コロニアリズムであったが、内容そのものよりも日本における北海道の開拓（植民地化）や先住民政策がほとんど知られていないという実態を知ることとなった。その場で2026年11月にダカールで次の大会が行われることが決まり、報告者も口頭発表に応募済みである。

UPPAの新学期が始まる9月から1月初めには、現地調査を本格化させた。現在にも残る行政界の飛び地を訪れるとともに、旧体制の中心地であった都市を訪れ、その歴史と表示の在り方を確認して回り、またその決定の在り方を調査した。自治体連合ルイ・アン・ベアルンの職員への聞き取りも行った。

また、UPPAの教員たちの専門性と地域認識に関わる4つの巡検に参加させてもらった。バステード・クレランスでは、現在は白い壁に赤い雨戸といったバスク的な街並みが保存されていること、ナヴァラ王国の歴史の中で作られた町という歴史があること、17世紀にマラーノの流入によってユダヤ人墓地が残されていることなどに触れられた。海岸部のオスゴールでは、その全体が保護対象となっていること、他方で細かい規定が必ずしも生活の中で守られていないことなどが説明され、学生たちが一つ一つ実態調査を行った。ピレネーのスペイン側のアルケザルでは、1990年代から観光開発が一気に進み、年間16万人の観光客が訪れるようになった一方、住民の減少により直近でも小学校が2校閉校になるという状況が説明された。ピレネーのオソー谷の巡検では、沼地の独特の植生やそこに関わる猟師の活動といったローカルな文化をどのように保護するかが話し合われるのを見ることができた。

1月初めにロンドンに移動してからは、LSEのスタッフや学生・若手研究者との交流を積極的に進めた。ロンドンはオリンピック後も大きな開発が続いており、街並みの変化も激しかったため、小さな変化を捉えるものとして彫刻やパブリックアートの設置や撤去に関する調査を行った。

その他、ポーでもロンドンでも講演の機会をもらい、主に日本の地理学会の研究動向や、日本の外国人受け入れ政策の問題点などについて説明した。

### 3. 研究成果

ポーにおいては、民主主義それ自体よりは、その範囲を考えるための行政区分や国境について考えさせられることが多かった。まずはピレネーを望む都市であることから、スペイン国境を超えることは珍しくはない。言うまでもなく、シェンゲン協定によって国境審査は廃止されており、自由に行き来ができる。それでも、それがどの程度の意味を持つのかということについて言えば、日常生活において毎日国境を越える通勤者を指す「フロントリエ」はそれほど多くはなく、フランス側の中心地であるポーや近隣の大都市であるボルドーやトゥールーズの方が明らかに身近な存在であるようだった。（もちろん、言語学的な近さがあるとはいえ、スペイン側ではスペイン語が中心になることも障壁として大きい。）ヴァカンスとなれば双方の行き来の機会は大きくなるが、国境は国境であり、都市計画に際してフランス人、スペイン人は、それぞれ来訪者という理解で、大きく地元意識が生まれるようなことはほとんどないようである。

他方、歴史的な領域は現在まで影響力を持っており、ナヴァラ王国はその一つである。

16世紀初頭には現在の国境線で区切られていたにもかかわらず、ピレネーをまたいだ王国であったという記憶によって、ナヴァラはEUの地域名にその名を残している。バスクの一部とみなされることもあり、そのような行政区分もあるが、ナヴァラと名乗るときには、むしろバスク海岸は異文化となる。そのような中で、大きな都市計画と小さな都市計画の位置づけは、単純な入れ子よりもう少し複雑な重なりを持っており、そこを整理し直す必要性を感じるようになった。

もう一つの区分として、自治体連合の重要性を意識することとなった。大都市においては、大都市を中心として郊外部を含むメトロポール(大都市圏)という区分があるものの、それは特に珍しいものとは考えていなかった。他方、地方における自治体連合は、現在でも3万を超えるフランスのコミューンを1250にまとめ上げた結果であり、コミューンの自治を残しつつ、行政の効率化を実現したものと言える。今後、民主主義のかたちとして、その意味を検証する作業をしていきたい。

ロンドン滞在で最も考えさせられたのは、ヴェトナム戦争時の性暴力を告発する「ライダイハン」像とBBC本社のレリーフ「プロスペルとアリエル」像である。いずれも女性への暴力がテーマであるが、その意味での連携はない。前者は設置時には議論があったもののその後あまり重視されておらず、後者は歴史的建造物の一部としてむしろ保護されている。いずれもより民主主義的な議論を必要としていると思われるが、その在り方はまだまだ手探りであることが見えてきた。

#### 4. 今後の展望

1年の研究成果は、いずれも今後の研究の展開に資するものであり、今後も研究を続けていきたい。ポーでの研究は、2026年度に採択された科研費基盤研究Bの「排外主義に抗する地誌学の可能性—認識論の問い直しと国際ネットワークの構築」において研究を続ける予定であり、ロンドンでの研究は法政大学の米家志乃布教授を代表として採択された「近現代日本におけるアートの実践と地理空間」の分担者としての研究で展開していく。

#### 5. 教育への効果

報告者は2026年9月に文学部の科目としてフランス現地研修を行うこととしており、15名の学生を連れてポーを再訪することとなっている。その際、UPPAの教員と学生たちと一緒に、ピレネーの名勝の一つとして知られるコトレで巡検を行い、スペイン国境越えも経験させる予定である。その意味で、今回の経験はそのまま教育に生かされることとなる。LSEの方は、大学院教育が中心となるため、今後、大学院生の現地派遣や研究員としての受け入れという可能性を広げていくこととしたい。